

黒住教 ホームラーニング #2



黒住教は、備前岡山藩の守護神社・今村宮の神宮であった黒住宗忠が、江戸時代（一八一四年）に開いた教派神道です。死を覚悟するほどの病を克服し、昇る朝日を持つ「日拝」の最中に天啓を得て、天照大御神と一体になるという宗教的体験をして立教しました。教祖宗忠神の教えは、一切万物すべての親神が天照大御神で、その尊いはたらきの中であらゆるものが存在するという世界観です。

安楽

朝顔の花の姿に迷うなよ

日かげまつまにしばみぬるかな（黒住宗忠）



江戸時代後期のこと、あるお金持ちの主人は、道楽息子の無駄遣いに手を焼いていました。主人が長年の辛抱と儉約で築き上げた大切な財産を湯水のように使うので、何とか息子を改心させたいと願っていたのでした。

宗忠「それはご心配でしょう。財産があれば安楽に暮らしていける。財産は安心のためのもので思っていましたがお話を聞いてみますと、財産があるからこそ、大変ご心配のようです。そんなに心配の種となる財産なら、いつそのことみんな無くしてしまっただけががですか。息子さんが色ごとで使い果たしてしまうお金です。あなたも一生の思い出に華やかな街に出て大散財をなさってみては？ 親子一緒に使えば話は早い！ **心配・心痛の種、苦労の種が全部なくなっただけで満足することでしょう！**」

あまり納得がいかないまま帰宅した主人ですが、翌日、思い立ち、華やかな街に出て一代の大散財をしたところ、それを「気のきかぬ遊びをするのはどこの田舎者か！」と隣の部屋からのぞき見たのが、そこに入り浸っていた当の息子で、「父親までが豪遊を始めたならたまったものでは無い！」と、慌てて引き上げたそうです。

ポイント

そうとは知らない父親は、もともと遊びなどには全く興味のない堅物ですから、遊びをやってはみませんが、一向に面白くもなく、やがて家に帰ってみると、息子がこれまでがうそのように真面目に働いていたのでした。

このお話は、物質的な豊かさを何より大切に思う現代に生きる私たちへのメッセージと受け止めたいものです。

「他人のふり見て我がふり直せ」との格言があります。

また、「反面教師」という言葉もありますが、親のふりを見て道楽息子が改心したお話です。お金に対する執着心の強い父親と、その苦労を知ろうともせず無駄遣いする息子、現代社会に相通じるお話です。



☆このお話を読んで

あなた自身は何に「安楽」を求めているらっしゃいますか。素直な気持ちでにを入れてみてください。

- お金 心 両方 その他

本当の「安楽」とはどういうことなのでしょう。人によって様々な答えがあることですが、あなたの思い、考えをお聞かせください。

○「黒住教ホームラーニング」では、黒住宗忠神の教えをわかりやすくお伝えすることを目指しています。本来であれば「教祖神」「宗忠神」等をはじめとした敬称の表記をするべきところを、編集上、あえて敬称を略した表現とさせていただいていることをおことわりいたします。

こころなあ
心直し

火事がいてそのまた上に胸を焼き
心の火事ぞまる焼けになる
損をしてそのまた上に気を痛め
命の損ぞまる損という（松岡清見）



わが家を火事で失ったことを非常に嘆き悲しみ、病気になる悩み苦しんだ人がいました。この人が「こうなったらおかげをいただく以外にはない」と思い宗忠の下を訪ね、火事になった次第を話しました。

宗忠「ご用心なさらぬと、二度焼けをしましぞ！」

と、凛然と言い、そのまま奥の部屋へと入っていきましました。

日頃は温和な宗忠からの予想外の言葉に驚きながら、実は言葉の意味を理解できずにいたその人に、その場に居た宗忠の弟子が即座に詠んだのが冒頭の二首の和歌です。

ユーモアの中に真理を含んだこの和歌を何度か繰り返すうちに「なるほど」と悟るところのあった病人の顔は見る見る活気を帯びてきて「分かりました。間違っていました」と心を取り直し、間もなく全快したということです。

「二度焼けをしましぞ！」とは、有り難いと同時に、厳しい言葉といえるでしょう。火災に遭ったことは大変な災難ではあります。そこに嘆いているうちに更なる災難がやって来るものです。「家財は失ったが、家族は無事だった。考えてみれば、有り難いことだった」と、難有る中に有り難きことに気付いて気持ちを切り替えることが「心直しの道」なのです。

ポイント

「二度焼けのお諭し」と題されたこのお話から「二度焼け」の恐ろしさを心深く学んで、難さえも有り難くいただくことのできる心丈夫な人生を目指したいものです。

実際の火事に遭うことはあつてはならないことですが、心の火事は人生において出合うことが多々あります。友人また職場の上司の何気ない一言や、納得できない理不尽な行為によつて心を痛めてしまうこともあります。得てして、そうしたことを言ったり行ったりする人は自覚がないと言われる。今、まさに苦しんでいる方もあるのではないでしょうか。

現代社会、複雑な人間関係においても、決して簡単なことではありませんが、前向きに「有り難く陽気な心」で生きることで、いざれ必ず「あの難があつたからこそ…」と、真に「難有り有り難し」を実感できる心境に到達するようにつとめていきたいものです。

☆このお話を読んで

あなたには「二度焼け」に似た体験はありませんか。
に✓を入れてみてください。 ある ない その他
 友人や上司の心ない言葉で傷ついたりした時などの心境や、あるいはそれを乗り越えた時の経験談やコツ、どのような学びがあつたかなどがあれば、教えてください。

謙虚 けんきょ

根をしめて風にまかしてあらそわず
柳を人の心ともがな (黒住宗忠)

争いごとの絶えない人の世にあつて「柳のような人の心で

ありたいもの」との願いが込められた和歌です。社会や人々に支えられて生かされて生きているという感謝の心から、謙虚で揺るぎない「根っこ」があるからこそ「柳に雪折れなし」の、しなやかでたおやかな心が発揮されるのでしよう。

ある日、子どもが風揚げをしている様子を見た宗忠は、「生きた枝に掛かった風はすぐに外れるが、枯れた枝に掛かった風は外れにくく、無理に引つ張ると風が破れるか枝が折れてしまう。人と人との間柄も同じことです」と、柔軟な生きた枝のような心であることの大切さを話しました。

今も昔も、人間同士のトラブルで最も多いのはお金にかかわることだと言われています。

ある夜の帰り道のこと。突然刃物を持った追剥の男から、大金を出すようを迫られた宗忠は物静かに答えました。

宗忠「こうして人気のない夜道で見知らぬ者にお金の無心になさるとは…。分かりました。ただ、今は半分しかないのです。今夜はこれだけ持ってお帰りなさい。残りの半分のお金は、今村宮の手水鉢のそばに埋めて目印の石を置いておくので、明日の夜に取りに来て下さい」

追剥の男は、思いがけない返答に戸惑いながらも言われるまま翌晩に今村宮を訪れると、確かに約束通りだったので、その誠実さに感じ入ると同時に、自らの間違った心と行いを深く恥じ、やがて宗忠の弟子になったと伝えられています。



ポイント

時は変わり、ある年の暮れのこと。親戚から借りていたお金を返済するようにと催促がありました。これは以前、確かに借りていたものですが、すでに返済していたものです。大金でしたが、宗忠は黙って再び同額のお金を支払いました。

誠をば神は見すらん濡衣を人には着せじ身は重くとも
その出来事があつた時に詠んだのが右の和歌でした。

またある時、生活苦のため困窮した農夫が、武士にお金を借りました。武士は農夫に期日が過ぎたので返済を催促すると、農夫はまだお金が用意できていなかったため、「黒住宗忠先生に渡した」と、苦し紛れの言い訳をしました。話を聞いた武士は不審に思いながらも宗忠の所へ確認に行きました。宗忠はまったく身に覚えがないことでしたが、武士の怒りが農夫に向かわないように、すべて自分自身の過失だったことにして、横領の冤罪を甘んじて受けたのでした。

☆このお話を読んで

「根をしめて」ということで、人間関係のトラブルに立ち向かう心構えや、他人のために自らが犠牲になること、人のために行動できることや謙虚さについて学びました。このお話を読み、あなたの周りに起こったこと、他人の勘違いから生まれた難題や、それに対処した体験談があれば、教えてください。

特にない方は、今後の生活において謙虚に過ごしていくための知恵や工夫、目標について教えてください。

迷信

なかなか人ごと遠くなりけり

あまりみ山の奥をたずねて（古歌）



宗教は時に、悩み多き人に現実逃避を促してしまうことがあるようです。信仰することで生前や死後の世界に目を向け、げんごうたいいま現在只今を疎かにしたり、おろそあえて現実から目をそらして甘い理想に心を奪われたりしやすいものです。宗忠は、現実をありのままに受け止めて、祈りにつとめ、心を養う結果として理想をも現実のものにしていく道を自らが示しました。

「あまり深山みやまの奥をたずね過ぎて、かえって人里ひとご（本来の居場所）から遠ざかることのないように」という和歌に続き「誰しも知恵が大事と考えて、次第しだいに神や仏から遠くなることばかり修行しています。その妨げになる知恵を捨てなさい」と言っています。私たち現代人は便利さを追い求めてIT化アイタイを推進し、かえって真の人間のことが分からなくなってしまう、人間味を失っているように思います。まさに「IT化」ならぬ「愛低下」となっています。



江戸時代末期、あるお金持ちは大金で購入したオランダ製の望遠鏡ぼうえんきょうを示しながら、お金持ちの主人「晴れた日には、これで瀬戸内海の向こうの四国まで見えます。『日の神ひのかみのおかげさま』も有り難いことですが『お金さま』も有り難いことです」宗忠「この望遠鏡は、夜でも見えますか？ ……そうですか、見えませんか。するとやはりお日様のおかげですね」

ポイント

注① 「瘧瘧日」 仏事・婿取り・嫁取りにはよく、灸きゅうを据えることは凶の日とされる
注② 「去いにました」 帰りましたの方言。「去いんだ」 帰った

江戸時代は現代から思えば迷信とも思えることが、日々の生活のあらゆる場面で大きな意味を持っていました。その日は陰陽道おんみょうどうという「瘧瘧日うんごうにち」^{注①}でした。宗忠の健康を気遣った人の善意で灸やいとを据すえてもらっていたところ、別の人から「今日は瘧瘧日！お灸きゅうを据すえたら体調を崩す日です。すぐにお止め下さい！」との忠告がありました。

灸をした人「瘧瘧日うんごうにちを知らず、申し訳ないことをしました」宗忠「さて、それでは続きの灸やいとをお願いします」

灸をした人「それでも、今日は…」と言いかけたところ、宗忠「瘧瘧日うんごうにちは、もう去いにました！^{注②}」

吉よし悪あしは心一つのことぞかし

日の善よし悪あしはともかくにも

との和歌を詠み、吉凶きつきょうにとらわれない境地を示しました。



☆このお話を読んで

迷信についてのとらえ方、人への思いやり、心のありようといったことをここで学びました。このお話を読んで、あなたのこれまでの人生でも、普段あまり気にしなくても北枕で寝ないとか、茶柱が立つと幸福を感じるなど、いくつか心当たりのことがあったのではないのでしょうか。私達は迷わないようにするための工夫とはどんなものなのでしょうか。そうしたことに対する体験談やご自身の思いがあれば、教えてください。

